四

その夕餉には、尾頭付きの鯛が出た。

笹塚孫一と六間堀で会ってから三日目の夕刻のことだ。

磐音も南町奉行所の役人たちも野晒しの仲蔵一味が襲来するのを淡々と待ったが、その気配はなかった。

「今日はまた馳走でござるな。なんぞ嬉しきことでもございましたかな」

「余計なことは聞かぬものじゃ。今晩あたり、現れそうな気がするでな、気を抜くでない」

「畏まりました」

磐音は膳を抱えて小屋に引きこもり、尾頭付きの鯛と潮汁で飯を食した。

井戸端でいつものように洗い物をしていると、納屋の竈から勢いよく煙が立ち昇っていた。そして、格子戸の隙間から湯気が洩れてきた。

磐音は小屋に戻ると、一刻余り様子を見た上で、隣家の瓦屋の敷地へと闇の中を忍んでいった。すると瓦屋の庭に引きこも荒れた水路に苫舟が舫われていた。

「坂崎にございます」

磐音がそう囁くと、苫舟がわずかに揺れた。

「笹塚様にお伝え下さい。ひょっとすると今晩、現れるやもしれませぬ」

「そのような兆候がございますので」

木下一郎太の声が囁き返した。

「尾頭付きの鯛が夕餉の菜に出ましたし、外から窺ってのことですが、おとくの行動がいつもと違うように思えます。なんぞ覚悟があってのことかと思いましてな」

「承知しました、笹塚様に伝えます」

磐音は再び庭伝いに小屋に戻った。それから半刻後、納屋の戸の開けられる音がして、戸口の前で洗い髪のおとくがじっと小屋を窺い、磐音が見張っているかどうか様子を見ていた。

磐音も小屋の戸を開き、黙したまま手をひらひらと振ってみせた。するとおとくは屋内に姿を消した。

夜半近く、磐音は夜具を肩から外すと、畳んで小屋の隅に積んだ。そうしておいて小屋を出ると、かねてから目をつけていた松の大木に攀じ登った。

太い枝に跨ると、下から見えないように身を隠した。

そんな姿勢で両手の拳を握ったり開いたりして、手が悴むのを防ぐ。

夜半過ぎ、史吉が来た。

これまでもなんどかあったことだ。

だが、この夜は、一刻を過ぎても史吉は戻る様子を見せなかった。

八つの時鐘が響いてきた。さらに四半刻、何事もなく過ぎた。

異変はふいに起こった。

磐音が寝泊まりしていた小屋を囲むように人影が現れた。一気に戸を開き開けると、抜身を閃かせて突っ込んでいった。

無論小屋は蛻の殻だ。

外の騒ぎに逸早く納屋の中の二人も気付いた。

おとくは、とろとろとした囲炉裏の火から戸口を見ると、父親の鯛造が大磯村に残していった形見の長脇差を引き付けた。

同時に史吉も懐の合口に手をかけた。

だが、野晒しの仲蔵たちはすぐには押し入ろうとはしなかった。なおも庭を見て回り、辺りの様子を丹念に探った。

磐音は松の木の上から小太りのことこが手を振ったのを見た。

表口と裏口、野晒しの仲蔵の一味は一気に納屋の中に躍り込んだ。

「まっていたよ！仲蔵」

洗い髪を背に束ねて垂らしたおとくは、黄菊を散らした友禅染の小袖を粋に着こなし、着流しの腰にきりりと帯を締めていた

老婆から一転した姿には、女盛りの妖艶さが漂っていた。そして、ある決意が顔に漲っていた。

「おとく、史吉を誑し込んでなんの真似だ」

縦縞の裾を絡げ、股引に手甲、道中羽織を着込んだ野晒しの仲蔵の腰には、長脇差が差し落とされていた。

「なんお真似とは、お笑い種だ。おまえはお父っつぁんや伴吉さんたちを売りやがったな」

「なんでえ、六年も前の一件けえ。確かに南町に垂れ込んださ。盗人に入って、どこの馬鹿が蔵の金を半分残していくものか。おめえの父っつぁんの独りよがりに、おれたち手下は危ねえ目を見ながら、いつも銭に泣いていたぜ」

「仲蔵」

と史吉が口を挟んだ。

「鯛造親分は、手下たちの行く末を思って、盗んだ金を貯めておられたのだ。きっちり四千八百両貯まったら、十六人の一統が三百両ずつ分けて堅気に戻る。それが親分と手下たちの約束ごとだったはずだ」

「史吉、てめえは、捨て犬が飼い主を探すようにおれに近づいてきやがったな。だれぞの身内か」

「おめえに密告されて三尺高いところに首を晒した伴吉の倅よ」

「大方そんなこったろうと思ったぜ。おめえは、おれっちをおとくのもとに引き寄せたと思っているかもしれねえが、今宵は預けてあった四千両、そっくり貰いに来たのさ」